

FADO

37

Janeiro 2003

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日…

NHK放映のニューイヤークンサートを見ながら、一人涙ぐんでしまった。オーケストラの一人一人の顔、それに聞き入る聴衆の顔、みんなそれぞれの思いで、古い年を締めくくり、新しい年を迎えたいんだろうな。どんなにつらいことがあっても、時は過ぎ、新しい年がやってくる。新しい年にすぐる思いで夢を託している人もいるだろう。そして、また、一年、新たな喜び、哀しみを紡ぎ始める。一人一人かけがえのない一生の一頁が、また始まる。一人一人の顔にその喜びと厳しさが溢れているのを見た。今までに感じたことのない人間へのいとおしさが心に広がった。これは、やはり年のせいだろうか？

やみくもに走りつづけていた若い頃には、見えなかったものが、感じられなかったことが、最近、見える、感じられる。「ナンセンス」と一言に切っただけで切りまくっていた若い頃。今は、そんな若者に、切られる立場だ。

オーケストラの演奏を聴くたびに、アルゼンチンの大地の歌声メルセデス・ソーサが歌っていた「ペーチョのヴァイオリン」という歌を思い出す。

ペーチョは楽団のヴァイオリン弾き
子供っぽい顔も弾くときには立派にみえる
だがかれは辛いヴァイオリンしか持ち合わせない

ペーチョには辛いのだ
その愛情と同じように子供っぽいヴァイオリンが
ペーチョのほしいのは
悩みや愛を呼んだりしない大人のヴァイオリン

ペーチョは自分のヴァイオリンが好きじゃない
けれども感じる ヴァイオリンの呼び声を
夜になると後悔して
悲しいひびきにまた惚れこむ

木でできた栗色の蝶々
がっかりしている赤ん坊のヴァイオリンは
弾かれず黙っているときでも
ペーチョの胸のうちに鳴りつづける

生と死 ヴァイオリン 父と母
ヴァイオリンは歌い ペーチョは風になる
そしてペーチョはもう楽団の中では弾けない
愛することと歌うこと、それはあまりにも辛いから

2002年12月30日

「五木寛之・月田秀子ジョイントコンサート2002」東京での最後の公演を終えて、すでに2週間が経とうとしている。引越してエネルギーを使い果たした所に、会報の発送、11月の前例のない過密スケジュール（北は札幌から南は福岡まで13公演をこなしたことになる）を縫っての、東京、大阪のコンサートのチケット発送、心身ともにぼろぼろの雑巾状態で、臨んだコンサートだった。五木寛之さんの強力なサポートのお陰で、今までにないほどの反響をいただいた。

ホッとした所で、気がついた。来年の仕事が全くないのだ。京都、大阪での3ライブは、収入にはつながらない。交通費と宿泊費を差し引けば赤になりかねない。でも、さらに気がついたこと、歌い始めて20年。月田の歌を聴きつづけてくれた人たちがいること。今回、初めて月田の歌を聴き、涙してくれた人たちのいること。歌いつづけよう。その確固たる意志があれば、きっと道は開ける。そう思い直して、2003年を迎えよう。

2002年1月1日

大晦日の日、大掃除をしていた私は大チョンボをしてしまった。風呂のフィルターを掃除しようとして、給湯口を回し始めた。「むっ、かたい！こんなことで負けてなるものか、女ゾ！」とばかりに、歯を食いしばり全身の力をこめて回した。外れたと思ったら、浴槽の奥で、「ゴーン」と無気味な音がした。給湯パイプが浴槽から外れてしまったのだ。慌てて東京ガスに電話すると、二人の作業員が来てくれた。が、現場を見て、開口一番、「これは、私たちの手に負えないですな。大層な仕事をしなければならぬとのこと。そんなわけで、お正月休みが明けると、お風呂は使えないこととなった。ああ、何てこった。こんなことなら、大掃除などしないで、ずばらに新年を迎えればよかった。せっかくの浴槽つきの新居で、風呂のない正月を過ごす羽目になった。

私はお風呂が大好きである。トイレと一緒にユニットバスでも、浴槽に湯を張り、ろうそくをつけて、温泉気分を装ったりしたこともある。まして、大晦日、湯船につかりながら、過ぎた一年に思いを馳せる年中行事が、出来ないとすると、これでは、新しい年を迎えられない！反省することひとしきり。「何事も、一人でしゃかりきになってやれぬもんじゃない。適当な所でgive upすることも必要か」と、独りごちた。風呂に入れないからって死ぬわけでもなし。毎日、死と隣り合わせて生きていかざるをえない皆さんの同朋のいることを思い、自分を恥じた。

というわけで、37年ぶりの東京での新年は、ちよびり淋しく始まりました。

2003年1月2日

年賀状を出しに、外へ繰り出した。東京の空とは思えないほど青く澄み切った空が広がっていた。いつも蟻のように人がウジャウジャいる道には、人影はなく、空車のタクシーが数台通り過ぎてゆくだけ。品川埠頭行きのバスを追いかわけて自転車のペダルを踏んだ。運河を渡り、東京水産大学を過ぎたところで、バスは見えなくなった。手袋もせず、薄着で出てきた事に気がついた。今朝の気温は1度だったという。寒さに、私は、すこすこ部屋に戻った。年をとったな、と思った。

2003年1月3日

私の初夢は、またまた引越しの夢だった。（もう当分は引越しはいやだと思っているのに）

引越し祝いのパーティを企画したのに、人は来るのに、なぜか、どこかに消えてゆく。「ねえ、どこへ行くの？」と尋ねる私に、客人の一人は、怪訝そうな顔をして、一つの扉を開けた。なんとそこには地下への階段があり、下を覗き込むと、ばかどかい木のテーブルがあり、その廻りに人がたむろしている。よく見ると奥の厨房では、湯気のたつ鍋をかき回す。なんと私の姿がある。「へー、こんな部屋まで付いていたんだ、この家には！」という私の声に、私を見上げて全員が「ここは、あなたの根城でしょ」と声をそろえての大合唱、その声がかたまる中で目が覚めた。



きうぴいライブレポ

専属歌手月田秀子さんの季節が今年もやってまいりました。しかも今回は、あの五木寛之氏とのジョイントコンサート。ジョイントコンサートというのを耳にした友人は「五木さんも歌うの？」と素直にきうぴいに質問してきましたが、実際は「トークと音楽のすばらしき出会い」をテーマに展開されました。三都公演の最後、東京公演の模様をお届けします。

五木寛之 & 月田秀子 JOINT CONCERT 2002

開催：12月6日(金)東京 新橋 ヤクルトホール

プログラム

第一部：孤独(SOLIDAO)/二つの栄光(DUAS GLORIAS)/サウダーデ(SAUDADE)/難船(NAFRAGIO)/洗濯(LAVAVA NO RIO LAVAVA)/汽車は八時に出る

第二部：それぞれのファド(FADO DE CADA UM)/愛(AMOR)/恐れ(MEDO)/川辺の民(POVO QUE LAVAS NO RIO)/鳥の歌/パルセロナの舟の上(SULLE NAVI DI BARCELONA)/大河の一滴/他アンコール「暗いはしけ」(BARCO NEGRO)/「丘の上のあばらや」(BARRACAO)

文章と歌というそれぞれの分野で独自の個性を発揮する二人のアーティストのジョイントコンサート。語りは歌になり、歌は語りにつながっていく。そしてそのリレーがひとつのハーモニーとなり、会場を包む。

今年も、客層は高めながらも若年層も昨年よりは増えていた。広い会場はほぼ満席。どんなふうになるのかしらと人々の顔から期待と興奮が感じられた。

冒頭、五木寛之氏がリスボン紀行を朗読。ミュージシャンたちの美しくも物悲しい演奏をしたがえ、その声は広がり、ファドの世界へと息がながる。

五木氏の言うところの「月田が歌えばなんでもファドになる」という月田秀子のファド魂をより深く感じられるように、今回ファドのほかにはギリシャ、スペイン、イタリア、ブラジル、そして五木氏の、映画にもなった名作「大河の一滴」のテーマ曲が組み込まれていた。

月田秀子にとっては、今まで以上に歌手としての本領発揮の場を与えられたことになったであろう。言い換えれば歌だけで勝負が決まる大変シビアな場

であったと思う。

昨年の12月の大阪サンケイホールで初めて月田秀子のライブに行ったわけなのであるが、それ以来数度足を運んでいるのはみなソロコンサートである。彼女は歌は当然なのだが、歌を歌っている間以外で自身の醸し出す雰囲気とパーソナリティに非常に魅力がある。それは人となりの垣間見える曲の合間の語りであり、そのときふとみせるしぐさである。

それは、人の心を惹きつけるという、アーティストとしては大変重要な才能である。ただ、正直言ってこれで許されるのかと思うような場面が過去何度かあったのは事実である。

しかし、彼女の痛々しいまでの歌に対する思いや姿勢の熱さ・強さを目の当たりにすると、それはそれで許されてしまっていたのだ。

おそらく五木氏は、月田秀子にとってそれが許される時期は終わった、または終わらせたいと思っているのではないだろうか。このまま許される世界ではそこでとどまってしまうと考えがあったたのかもしれない。

そして、その世界から脱するきっかけとして、今回は、ファドというひとつの二人の共通テーマ(音楽ジャンルとしてだけでなく、ファドというものを通しての人間、人の運命など、五木氏の語る世界との共通項)だけに語りの焦点を絞り、絞られた純粋な一滴としての歌で勝負する場を月田秀子に与えたのではないと思う。

これも彼女の運命、神の思召しなのかもしれない。道は厳しいと思う。しかし、こうした貴重な機会を与えられる人は、そうそういるものではない。

非常によくまとまったステージであった。バックのポルトガルギターとギター、ベース、シンセサイザーおよびピアノの演奏もすばらしいものであった。が、今までそのオーバーヒート気味な熱さに慣れていたものにとっては何かが変わってしまったなあと思わざるをえない。

思いきり沈んだ釘もなかったかわりに時々飛びぬけて出ている釘が今回みあたらなかったというべきか。

しかしこれは、これからしっかりとまっすぐ釘を打ち直し、それが傾ぐことのないように、より完成されたものに近づくための、彼女の試練の始まりなのではないか。

そう思えたとき、やっぱり今回も月田秀子を許せたのである。

cartas

●11月25日の晩は、大変幸せな時間を過ごさせていただきました。さて、指定の6階に上がったが、様子が変だ。まわりに店はなく、人の気配すらない。手書きの矢印つき案内表示のみが。高まる不安。やっとたどり着いた扉の前で、もし、懐かしい秀子さんの歌声が聞こえてこなければ、ここは都会の中の「注文の多い料理店」ではないかと、逃げ出してしまったかもしれない。

というわけで、苦勞のかいあって、5年ぶりの再会。秀子さんの歌に耳を傾けながら、また、歓談しながら、この5年は、大きかったなとひとひらごち。その間に、あのアマリア・ロドリゲスとの別れが、そして黒田清氏、カルロス・ゼルとの別れがあったのです。[ファド歌手は、40を過ぎなきゃ]というのが私の独断的持論の一つでもあります。大台のつた秀子さんの歌に、さらにサウダーデと円熟味がまってきた、と眉間の二本のしわ(これは会報35号の馬氏のエピソード帖より)を見ながら感動する私がありました。5年前に、秀子さんは覚えていないだろうけど、「ヌカミンくさいファドだけ」といっていましたが、今や、さらに発酵の度合いを深め「月田秀子のファド」の領域を確立しつつあるなと感じました。一般的に文化の伝播の過程で、本国ですたれたものが遠隔の地で純粋な形で温存・伝承されることはあり得ることなので、想像力が刺激されもします。特に妖艶までの(という表現が適切かともかく)低音に接し、こちらの感性がビリビリ(いや、ヒリヒリ、ゾクゾク?)する体験は「月田秀子のファド」ならではのものです。

有り余る思いはありながらも音に接していなかった私のもとに、後日秀子さんから2枚のCDが届けられました。私の「失われた5年」を取り戻すかのように繰り返し聴き「半病人」になりかかっています。そして同封してあった「月田秀子ファド倶楽部」入会の案内。人見知りタイプの私は、普通通こって躊躇するのですが、故黒田清氏が会長を引き受けたとあって、即座に仲間入りさせていただきました。ジャーナリズムの「自殺現象」が繰り返しているこの国の現況を見るにつけ、ジャーナリスト黒田清の名は、私にとってまばゆい光を放っていましたので、ああ、ここで「失われた5年」が悔しい。

それにしても、五木寛之氏といい、月田秀子を支える人達に共通する「何か」に胸が熱くなります。五木氏には、タンゴに関する小説がありますが、「タンゴ出身」の私には大変興味深く思われます。私は二十歳の頃から「タンゲイロ」でした。が、「ちょっとファドでも」がいつのまにか深みにハマってしまったというわけ。秀子さんの過去のスケジュール表を見ても、東北はほとんどないようで、この不毛地帯には何としかねればとは思っています。(仙台/UK)(不慣れた大阪で、やっとたどり着いたアートクラブ、本当にご苦労様でした。迷子になるというのは、しんどいけど、色々な出会いがあって、あとで思うと結構楽しいものではないでしょうか?正道をゆくより、裏道が好きな月田の勝手な感想です。

実はアートクラブ、昨年末に「ぼや」を出し、急遽、同じビル6階で仮営業をしていたのです。あの日も、マイクが煙くさかった。ママの播本敬子さんも、他店への休業補償やら、後片付けやらで、そうとう疲労困憊してましたが、それでも、「やるっきゃない!」との開き直りに近い強い意思表示に、私たちミュージシャンと子ども、皆様の心からのご支援をお願いいたします。

●圧倒的な存在感と圧倒的な迫力あるヴォーカル

「大江能楽堂ライブ」で構成・演出を担当させていただきました坪倉謙之です。本日、大阪・サンケイホールでの五木寛之さんとのジョイント・コンサートを拝見させていただきました。

一言、圧巻でした! 出色の舞台だと思います。素朴で暖かみのある語りとお話の五木寛之さんの圧倒的な存在感と、それに触発された月田秀子さんの圧倒的な迫力あるヴォーカル、そして勿論この両者に相互にインスパイアし合うミュージシャンの実に豊かなハーモニーが渾然一体となった素敵で密度溢れたコンサートでした! 語りと歌とミュージシャンのそれぞれの役割が上手い、なんていうような次元ではなく、これが本当のコラボレーション・共同作業なのだ痛感です。そしてプログラム曲では「丘の上のあばら家」の爆発的な生声の讃歌とも言えるエネルギーな歌も勿論良かったですが、やはりなんと言ってもアンコール前の正式プログラムの最後の曲「大河の一滴」が秀逸として、五木寛之さんの語り・その内容、そして月田さんのヴォーカル、三位一体、いや、あらゆるものが、混沌の中から新たに浄化し昇華して、もうファドとかシャンソンとかタンゴとかの音楽のジャンルみたいなものはどうでもよく、全ては「音楽」としての大河の一滴に収斂されるんだ、という大きな大きな、うねりのようなものを感じた一曲でした! ある種凄みすら感じた曲であり、舞台でした! 実に上品でゴージャスでそれでいてシンプルな、美味しい美味しい料理をご馳走になったような、私にとっては、充足の極みで、かなりエキサイトしております。またインスパイアもされ、ある種自能的とも言える創造的刺激を受けており嬉しくなりません。五木寛之さんも仰ったように、この種の刺激が、長生きの秘訣なのかも知れませんよ。皆様も是非足をお運び下さい。きっと「素敵なお土産」をお土産にされることでしょう。

(大阪/坪倉謙之)

(ホームページの掲示板に寄せられたメッセージから転載させていただきました。ちょっとほめすぎじゃござんせんか?でも、五木さんの語りの素晴らしい額縁のお陰で月田のファドという絵が活かされた舞台だったと心から思う。この他、たくさんの方から、励ましのお手紙をいただきました。これをステップにこれから10年は、がんばってゆこうと思っています。)

ficção

読切連載

秀子のエピソード帖—芸術家とケータイ—

内間天馬

まさか、まさかやるとは思わなかったなあ。前回のこのコラムで、せっかくの五木寛之さんとのジョイントなんだから、彼の作品「愛の水中花」をやんなさいよ、てな事冗談でそそのかしたら、本当に歌うなんて。網タイツ姿じゃなかったけど。

日刊ゲンダイの五木さんの連載「流されゆく日々」の10回にわたるジョイント・ツアー始末記の白眉は、12月7日の文章です。サービスはサクリフェイス(犠牲)と一対の言葉としつつ月田秀子の最近の変化を捉え、一最近の彼女の歌は、昔よりずっと大きく、広く、人間的になった。こういう歌手は、いまだきかなかお目にかかることがない。これからの十年間、彼女に注目していきたいと思う—と結んでおられる。ま、還暦過ぎても歌わなアカンちゅうことやね。僕も、今回、サンケイホールの片隅で、月田さんの歌、以前とは確かにちょっと違うぞ、と感じておりました。

五木さんの作品を貫く命題は、反権力、反主流、敗者の哀愁、そしてデラシネじゃないかと思うんですが、楽屋でお会いしたとき、彼が着ていた日雇いのおじさんがよく着ている、襟にボアの付いたカーキ色のジャンパーが印象的だった、と言うと考えすぎでしょうか。

そこで、彼の審美眼を感じることでできる異色の本を紹介しましょう。「ちいさな物みつけた」(集英社文庫)。いきなり北欧製のゴム長のゴルフシューズが出てきたり、アールヌーボーに対する

アールデコに寄せる彼の心情など、ご自身の愛用品を写真とともに紹介しているにも拘わらず、不思議に彼の物欲のなさを感じることでできる爽やかな本です。もうひとつ、ずばり「暗いはしけ」という作品ご存知でしょうか。1969年に書かれたこの作品は、「哀愁のバルティータ」(集英社文庫)に収録されていますが、悲劇的な結末がリスボンとコインブラのファドの違いが遠因である点に瞠目します。ぜひご一読を。

さて、月田さん引越しちゃったねえ東京へ。大阪の酒呑み仲間としては、ちょいと寂しい気もするけど、東京への転居を強力に勧めた者としては、幾たびかの挫折を越えファド一筋に生きてきたその根気に対する開花を願うばかりですわ。夏目漱石も言うとります。一人は才能の前には頭を下げないけれど、根気の前には頭を下げる—根気も才能もないアカンたれの僕なんか、ホラ、頭下げっぱなしでっせ。

新しい環境、新しい人々、新しい彼氏?、新しい呑み屋(コレは大事ね)、そして新しい電話番号。電話といえば、以前、彼女にどうしてケータイ持たないの?って訊いたその答えが「だって、そもそも電話嫌いなもの」。僕思うんやけど、真の芸術家って、ケータイなどという世俗的文明は似合わないのちやう? 知る人ぞ知る浪速のショパン吉山輝さんがつい最近不本意ながらケータイを手にしたら、彼のファンが「ケータイなんて似合いませんわ!」だって。まして孤高のファディスタ月田秀子にケータイなんて想像も出来ないよね。僕は断言する! 月田秀子はその生涯においてケータイを手にする事は決してしないであろう! あっ、月田さんがやってきたぞ。ちようどよかった、月田さ〜ん! 東京の新しい電話番号教えてくれる? 『エエ、いいわよ。あ、そうそう、ケータイ買ったわよ、きのう』。エッ?

fados canções

道 の 名

訳詞 Caldo Verde

NOME DE RUA

Letra : David Mourão Ferreira
Musica : Alain Oulman

あなたは私に 道の名をつけた
リスボアのひとつの道の
人の名より
ずっと多い道の名
小舟の名のついた
ひとつの名を私に

Deste-me um nome de rua,
de uma rua de Lisboa.
Muito mais nome de rua
de que nome de pessoa
Um desses nomes de rua
que são nomes de canoa

淋しい道よ それは
夜には誰も通らない
嫉妬は矢となって刺し
愛はあふれるばかり
人目につかない道よ それは
夜には誰も通らない
詩人の魂が
ふいに私たちを抱きしめる

Nome de rua quieta
onde à noite ninguém passa,
onde o ciúme é uma seta,
onde amor é uma taça.
Nome de rua secreta
onde à noite ninguém passa,
onde a sombra de um poeta
de repente nos abraça.

ほろ苦い想いと
逢瀬を重ねたマドラゴア
焦がれて探し求め
許しの笑みで包み込む
あなたは私に道の名をつけた
リスボアのひとつの道の

Com um pouco de amargura,
com muito da Madragoa,
com a ruga de quem procura,
e o riso de quem perdoa.
deste-me um nome de rua,
de uma rua de Lisboa.

淋しい道よ それは
夜には誰も通らない
詩人の魂が
ふいに私たちを抱きしめる

Nome de rua quieta
onde à noite ninguém passa,
onde a sombra de um poeta
de repente nos abraça.

11月29日札幌を皮切りに、12月3日大阪、12月6日東京と「五木寛之・月田秀子ジョイントコンサート」が開催された。

札幌は、5年間にわたる北海道ファドファンクラブの地道な活動にあわせて、北海道新聞が大々的に紙面を割いて宣伝してくれたお陰で、700席がぎっしりと埋まる大盛況。釧路、帯広、道内のあちこちから駆けつけてくれた人たちもいた。ほとんどの公演が本番で幕が下りた。公演後、サインのためにロビーへ出ると、サイン待ちの人たちの長い行列が出来ていた。CDにサインを求め、言葉なく熱くうんだ瞳に出くわす時、私は、心からやってよかったと思う。「他界した友人の分もしっかり聞かせていただきました」と一輪の赤い薔薇を差し出された。その友人とは、ファンクラブ会員でいつも赤い薔薇を一輪ステージで渡してくれたI氏のことだ。胃がんでその年帰らぬ人となった。札幌の人たちの反応は本当に素朴で暖かい。

大阪のサンケイホールは、20年近く年末にコンサートが続けてきた会場だ。初めて、ソロコンサートをした時と同じ緊張感を拭い去れないのが不思議だ。五木寛之さんと一緒にのせいかな、初めてのお客様もかなりいた。「会場いっぱいになりたいね」との五木さんの思い入れは、果たせなかったものの、今までで一番の入りだった。

東京のヤクトホールは、五木氏のご助力があって、574の席は、何とか一杯になった。

当日は、五木氏の「菊池寛賞授賞式」と重なったにもかかわらず、早々に授賞式場から、駆けつけてくださった。

この一連の公演を成功に導いてくれたのは、五木寛之さんの、多岐にわたる情宣のお陰だったといえる。本来は、主催者がすべきことを、五木さんがやむを得ず引き受けてくれたのだ。チケットをさばくのではなく、いかにたくさんの人に、聞いてもらうかが大切なのだ。

特に、日刊ゲンダイ連載の「流されゆく日々」では、10回にわたって、このコンサートのことを連載して下さった。特に最終稿「ジョイント・ツアー始末記⑤」は、私がこれから歌ってゆく上で、最大の励みになるだろう。ここに、転載させていただきます。

「歌」う、という言葉に、連想する言葉がある。「訴」う、という言葉だ。歌をうたうとは、こころの中にたぎる何かを人に訴えかけることではないのか。

それが世間(社会)であることもあるだろう。他人であることもあるだろう。

天地、自然、大いなるもの(神や仏)に訴えるということもあるにちがいない。「おれは人のためにうたっているんじゃないんだ」と、いう歌い手がいる。「うたいたいからうたう。ただ、それだけさ」

しかし、それは「自分」という対象にむけて「訴」えていることなのではだろうか。

歌には、聴く対象が必要である。「訴」える相手がいなくては、歌は成立しない。そう考えると、コンサートをやるということは、会場に人を招くという前提のうえになりたっていることがわかってくる。

サービス、という言葉は、しばしば誤解され、蔑視されることが多い。酒場でホステスが、言いたくないお世辞をいうのがサービスだと勘違いしている人もいる。

サービスはサクリフェイスと一対の言葉だ。奉仕と犠牲。みずからの血を流し、肉を削って相手に捧げる、それがサービスの本当の意味だろう。

その意味で、歌い手は聴衆に必死でサービスしなければならぬ。それが「客」にこびる」とことは根本からちがう行為である。

月田秀子という歌い手は、これまで自分のために、そしてファドのために歌っているかのように見えるアーティストだった。

彼女は客にも、主催者にも、共演者にも、決して「こびる」ことをしない。自らの信じるファドに一筋の歌ごころを捧げてきた真のファドうたいである。

しかし、この数年間の舞台を聴いていて、少しずつ月田秀子が変わり始めているのを私は感じる。

本当の意味での歌う者のミッションに目覚めたのだろう、と私は勝手に思っている。

最近の彼女の歌は、昔よりずっと大きく、広く、人間になった。こういう歌手は、いまだきかなかお目にかかることがない。これからの十年間、彼女に注目していきたいと思う。

日刊ゲンダイ連載「流されゆく日々」連載 6655回(2002年12月7日)より転載

informação

- ラジオ大阪「浪速なんでもラジオは道づれ」2月1日(土)、8日(土)いずれも午後5時25分～5時55分(30分間)にゲスト出演、道をテーマにお話します。
- NHK衛星第二放送(放送予定日3月6日(木)午後9時半から)で、五木寛之さんのゲストで歌います。レギュラー出演の弦哲也さんの他、都はるみさん、前川清さん等ベテラン歌手の中に混じって、一曲歌わせていただきます。
- 別紙のように、月田秀子ファド倶楽部発足10周年記念として、「マカオで月田のファドディナーショーを聴くツアー」を企画しました。この機会に、ポルトガルの面影残る街を月田と歩いてみませんか? 会員以外の方のご参加も、もちろんOKです。別紙チラシをご参照の上、皆様のご参加をお待ちしています。

<月田秀子のスケジュール>

1月22日(水) 京都・四条河原町「巴里野郎」 問合せ: 075-361-3535 ステージ: ①8:00 ②9:00 ③10:00(入れ替えなし) チャージ: 3,500円	2月27日(木) 大阪・心齋橋「アートクラブ」 問合せ: 06-6212-2870
23日(木) 大阪・心齋橋「アートクラブ」 問合せ: 06-6212-2870 ステージ: 8:00から3回(入れ替えなし) チャージ: 2,800円	28日(金) 大阪・南方「三裕の館」 問合せ: 06-6304-1745
24日(金) 大阪・南方「三裕の館」 問合せ: 06-6304-1745 ステージ: ①8:00 ②9:00(入れ替えなし) 赤ワイン・オードブル付5,000円	3月9日(日)から13日(木) マカオツアー
2月19日(水) 東京・松涛「マヌエル」*要予約 予約: 03-5738-0125 開 宴: 19:00 お一人様: 8,000円(ポルトガル料理フルコース+ワインテージポルト)	26日(水) 京都・四条河原町「巴里野郎」 問合せ: 075-361-3535
21日(金) 東京・赤坂 「ノヴェンバー・イレブンス」 問合せ: 03-3588-8100 ステージ: ①7:30 ②9:30 (入れ替えなし) チャージ: 3,500円	27日(木) 大阪・心齋橋「アートクラブ」 問合せ: 06-6212-2870
26日(水) 京都・四条河原町「巴里野郎」 問合せ: 075-361-3535	28日(金) 大阪・南方「三裕の館」 問合せ: 06-6304-1745

*今年から、関西でのライブ日程が以下のように変わりました。赤字もちだし覚悟の関西でのライブになります。一人でも多くの方にお越しただけると、何よりも嬉しいですよ。

第四水曜日: 「巴里野郎」
第四木曜日: 「アートクラブ」
第四金曜日: 「三裕の館」

<編集後記>

松の内も開け、時が加速し始めた。ライブ会場探しと称して、夜の町を徘徊している。それにしても、東京は古くから続く店が残っている。目先の損得だけでなく、大切なものを育み、守る土壌が東京人にはある。寄り合い所帯のような都会では、ほんの少しでも、人を思いやる心が必要不可欠なのだということを、彼らは本能的に知っている。と、今のところ信じている月田です。今号から印刷・編集は、中学の同期生、柳田誠君がしてくれることになりました。深謝。(月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ

http://www.fado.jp/

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第37号
- 2003年1月25日発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行 「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒108-0075 東京都港区港南1-8-27 日新ビル1406号
- TEL&FAX 03-3458-9806